

5人の入居者が語る「だから、やっぱり、冷泉荘」。

入居したきっかけも、好きなところも、いろいろだからおもしろい。
個性派揃いの入居者たちが語る冷泉荘との出会いと魅力。



《代表》松隈隆由樹さん

冷泉荘
A棟101号
雨しくま
リノベーションサロン

「冷泉荘と上川端商店街を結んで、博多部の街を盛り上げたい」

▶ 根っからの博多っ子で、山笠では東流に参加。自分は博多部の町と町の人々に育ててもらったようなものです。苦しい時にたくさん助けていただいたので、一生をかけてご恩返しをしたい。マッサージ店を開く時も地元でと決めていました。元の同僚から紹介された冷泉荘はとてつもなく古いマンションでしたが、自分たちでリノベーションできるという話だったので、迷うことなく即決。山笠の仲間にも手伝ってもらい、今のサロンが形になりました。自分は上川端商店街の方々と交流があるので、冷泉荘と商店街の橋渡しの役割を担えたらと思うんです。ここを拠点に地元のイベントや清掃活動に参加できることに、ただただ感謝。地元のために自分がお手伝いできることはまだまだあるはず。今後は冷泉荘で博多の昔ながらのしきたりや文化を勉強する会を開いて、博多の魅力を多くの人に発信していきたいですね。

「すべての表現活動の拠点がここ。冷泉荘はまだだももっと楽しくなる！」

▶ 表現者(=アーティスト)とイベント主催者の間に入って、双方の調整役として芸術現場の制作に携わっています。活動内容は、アートイベントの企画から、作品づくりと並行するワークショップの実施や学生さんとの協働作業、絵本作りや、灯明イベントの制作など多岐にわたりますが、私が関わるすべての制作や表現の拠点が冷泉荘。入居直前に詩の作品をこの冷泉荘全体にちりばめて展示設置したことはその後の活動の大きなヒントにもなりました。A10号の田中真さんと共同運営している、レンタルサイクルと自転車ツアーの「福チャリ」も、冷泉荘だからできることなんですよ。B棟1階の多目的スペースだってトークイベントとか展覧会とか、まだまだ色々試したいんだよね。冷泉荘ももっと楽しくなると思う！

冷泉荘
A棟42号
akiworks
事務所



《芸術現場調整家》徳永昭夫さん

「県外から来た人も冷泉荘を見て喜んでくれる。こんな空間を持ちたいって」

▶ 自分たちで部屋を気兼ねなく、思い切りリノベーションをやってみたい！そう考えていた時に友人から冷泉荘を紹介してもらいました。前に入居していた方が床の一部フローリングにされていたので、それを生かしながら床を張り替えたり、棚やカウンターを作ったり。できるだけ新品を買わずに空間づくりを楽しみました。今はここでアクセサリー教室を開いています。作品の作り方と販売のノウハウを教えているのですが、全国的にもこうした教室は少ないためか、東京や仙台からも生徒さんが通ってくれています。他にも、冷泉荘では3カ月に1回のペースでおおぞら市も開催中。生徒さんや知人のアーティストの作品発表の場としても喜ばれていますし、今後も続けたい楽しい企画のひとつです。こうしたイベントを通してもっといろいろな方に冷泉荘に遊びにきてもらえたら嬉しいですね。



《アクセサリーデザイナー》下條恵里さん

冷泉荘
B棟44号
9sta
アクセサリー教室

「学生集団だった僕らを信頼してくれた、懐の深さに感謝です」

▶ 「地域はよりクリエイティブに。文化はもっとインクルーシブに。」それがドネルモのモットー。今後20年、30年先を見据えて、興味がなさそうな人も巻き込みながら地域内のネットワークを様々につなげ、自発的に支え合える環境づくりのサポートを行っています。冷泉荘に拠点を置いたのは、学生団体を卒業し、本格的に活動しようとして一歩踏み出した頃。A42号の徳永さんから知っている方の紹介もありましたが、収益もはっきりしていない団体に快く部屋を貸してくださったことに驚きました。僕らのようにオリジナルの企画やアイデアで社会に働きかけていく団体にとって、こうして都会の真ん中に集まり、時間を気にせず話し合える拠点を有することは、活動を発展させていくうえでとても重要なんです。これからもし学生たちが気軽に足を運び、新しい試みにも挑戦するような場所であり続けてほしいと願っています。

冷泉荘
B棟55号
NPO法人ドネルモ
事務所



《代表》山内泰さん

「冷泉荘は最先端。これまでなかった領域を世の中に広げて見せた」

▶ 世の中のクリエイティブな仕事はすべて、世界と接触しないと成立し得ないものです。詩も文学もアートも、もっと多くの人に向けて開かれたものであるべき。私は2009年から冷泉荘の一室をアトリエとして利用していますが、単なる仕事場ではなく異文化交流の場にしたいと考えました。月に1、2回講義の教室を開く他、「冷泉アート夜話」という異ジャンルで活躍する人々を招いての講演会、落語会なども行っています。人々が年齢や職業の枠を越えてここに集まり、一流の人と話をすることで刺激を受け、新たなインスピレーションを得てくれたらうれしい。冷泉荘には「開かれている」「ユニークである」「最先端である」という3つのテーマが必要だと私は考えましたが、特に注目すべきは「最先端である」点。日本では冷泉荘でしかやっていない新しい領域を、今の時代に合う形で世の中に広げてみせた、とても貴重な場だと思います。



《詩人》渡辺玄英さん

冷泉荘
A棟41号
渡辺玄英事務所
詩のアトリエ

「教室には自然と感覚的に合う方が集まります」

▶ 昔から古い建物が好きでした。歴代の住民たちが大切に受け継いだ思いを感じるからかもしれませんね。新しい物件にはない、時間の蓄積に心惹かれます。冷泉荘も50年以上経っているとは思えないモダンデザインで、アトリエとして2006年から入居しています。もともと教室は他でも開いていて市内5カ所ありますが、ここ冷泉荘の教室で習いたいという方が大勢いらっしゃるんですよ。私の教室では、敷居が高いと思われがちな日本画の敷居を低くして、興味を持っている人に気軽に知ってもらいたいと考えています。日本画は画材が大事。学びのスタイルは自由でもまずはこの画材の魅力と特徴を伝えていくこと。それが結局、画材や道具を生産する職人さんの仕事を守り、伝統ある文化を守る礎になるからです。教室には、そうした背景にある思いもきちんと理解してくれる方が自然と集まってくるみたいです。

冷泉荘
A棟31号
アトリエ博音
日本画アトリエ 教室



《日本画家》比佐水音さん

INTRODUCE OF MR.SANDER

冷泉荘の顔
名物管理人の
サンダーさん



「冷泉荘の魅力象徴するのは、管理人のサンダーさん。今回、入居者の方々から何度もそういう言葉を耳にした。管理人の“サンダーさん”こと杉山紘一郎はスペースRデザインのスタッフであり、冷泉荘を運営するディレクターでもある。いつもカラフルな洋服に身を包み、従来のビルの管理にありがちな“威圧感”とか“近寄りたがさ”とは真逆のキャラクターは一度会うと忘れられないインパクトだ。

杉山は大学院ではエオリアン・ハーブの研究で芸術工学博士を取得。その研究にまつわる実験にスペースRデザインの社屋を利用したのがきっかけで、社員となった。先代管理

人のアシスタントを経て2代目管理人となつてからは、独自のスタンスで建物と入居者、入居者同士、入居者と街の人をつないできた。といっても、彼は基本いつも管理人室にいるか、階段や表の道を掃除している(だけのようにも見える!?)。でもだからこそ誰もが相談をもちかけやすい“安心感”や和やかな雰囲気冷泉荘にはあるのではないだろうか。

「大切にしているのは“1人の入居者としての立ち位置”。入居者さんよりちょっと下の目線を持って、できる限りみんなの活動を応援したいと思っています。僕は『心地よい混乱を与えることが、人の学びや経験につながる』という学生時代の教員がとても好きなのですが、冷泉荘も常にそういう場所であってほしい。何があるのか分からないけれど、ここに来たらなんか落ち着く、とかね。」



そんな杉山が常駐する管理人室にはユニークな楽器や玩具、彼が制作する『月刊冷泉荘』、イベントのチラシ、冷泉荘のリノベーションの歩みを紹介したパネルなどを見ることが出来る。実は忙しい時もあるけれど、“サンダーさん”は冷泉荘の顔として、いつもここで暇そうに客客を待っている。ぜひ気軽に遊びに行ってみよう。

OUTLOOK OF REIZENSOU

冷泉荘からまちに広がる豊かなコミュニティづくり。

冷泉荘を拠点に街には新しいコミュニティが生まれた。こうした流れを受けて、私たちは今後、冷泉荘周辺の古いビルを持つオーナーやそこで暮らす入居者の方々にビンテージビルの魅力を伝えエリア全体を盛り上げたいと考えている。

たとえば冷泉荘から公園を挟んで徒歩3分という至近距離にある「蝶和ビル」。ここを「サテライト冷泉荘」と位置づけ、新しい生き方・働き方を創造する人々が集い新たなコミュニティが生まれるビルとして再生する事が目標だ。

1971年に建てられた「蝶和ビル」は、京都の呉服店が創業85周年を記念して建設したビルである。スペースRデザインが掲げるビンテージビルのコンセプトや、ビンテージビルを拠点としたコミュニティづくり共感して下さるこのビルのオーナーは、私たちにとって大切な“仲間”。オーナーのご理解とご協力もあり、現在本館と新館ではまたユニークなリノ

ベーションが進行中だ。冷泉荘が「表現を発信する場」だとしたら、「蝶和ビル」は「クリエイティブが育つ場所」。舟底天井など職人の手仕事があったところに生きた本館の部屋は、未来に伝えたい貴重な日本建築様式。アトリエやオフィスとして使うだけではなく、暮らすことを前提にしたリノベーションを進めている。めざすのは、京都の老舗呉服店がこだわった心落ち着く和の内装を生かしつつ、入居者が自身のクリエイティブな要素をじっくりと育てる空間づくりだ。

「冷泉荘」と「蝶和ビル」は、人間にたとえるならいとこ同士の関係と思っていた。同じクリエイティブな精神を持ちながらも、両者にはそれぞれ異なる性格や個性があり、独立した1棟のビルなのだ。ただ、2つのビルを行き来する人の流れができれば街の風景は変わるし、間に広がる冷泉公園にもまた新たな利



CHOWA BLDG.
蝶和ビル
【構造・規模】本館・新館 / RC造6階建
【築年】本館1971年(昭和46年)
新館1989年(平成元年)
【所在地】福岡市博多区店屋町4-8

用方法や可能性が見えてくるに違いない。こうして他にも新しい冷泉荘の“いとこ”が増えていき、そこに冷泉荘の大家族ともいえるコミュニティが育つと思うワクワクしてくる。その発展には蝶和ビルのオーナーのような“仲間”の存在も欠かせない。

また、心強いのは冷泉荘に関わった人たちの活躍。ここで培った人と人とを結ぶノウハウを役立て、他の地域で活躍している人が大勢いることだ。その1人、冷泉荘の初代管理人である山本剛司さんは今、福岡県田川郡にある川崎町で観

光協会を開き、事務局長もしている。かつては「川崎町にはPRできるものが何もない」と感じていた彼を地元に戻らせたもの。それは、冷泉荘で管理人をするうちに芽吹いていた“様々な人を文化でつなぐ場をつくる”という情熱だった。

かつて老朽化したただの古いビルだった冷泉荘にまた活気が戻ってきたように、山本さんのように冷泉荘の思いを受け継いだ人々が他の地域で人と人を結び、新しい文化を育む。そして地域に活気が蘇る。それもまた私たちスペースRデザインの願いである。